

氏名(本籍)	まつ い けい すけ 松 井 圭 介 (東京都)		
学位の種類	博 士 (理 学)		
学位記番号	博 乙 第 1,396 号		
学位授与年月日	平成10年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	地 球 科 学 研 究 科		
学位論文題目	Geographical Study on the Sphere of Kanamura Betsurai Shrine Faith (金村別雷神社信仰圏の地理学的研究)		
主 査	筑波大学教授	理学博士	高 橋 伸 夫
副 査	筑波大学教授	理学博士	佐々木 博
副 査	筑波大学教授	理学博士	斎 藤 功
副 査	筑波大学教授	理学博士	田 林 明
副 査	筑波大学助教授	理学博士	手 塚 章

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、崇敬祈願型神社に対する信仰の受容形態に関する地域的な差異を、産土神祭祀を含む複数の信仰間の受容形態の差異という視点から解明しようとするものである。従来の信仰圏研究においては、信仰圏の形成過程及び発展過程という歴史的側面への関心が強く、また、信仰者の分布よりも個々の信仰の形態に対する考察が重視され、山岳宗教が生起する地域構造としての信仰圏の分析に対して不十分であり、信仰圏内における受容形態の差異が十分に解明されたとはいえない。特に日本の宗教の場合、欧米のキリスト教の宗教伝統とは異なり、複数の宗教が個人や集落を単位に重層的に信仰されており、複数の宗教間の階層的な分布構造を分析することが必要である。本研究の課題は、中小規模の信仰圏を有する神社を事例とし、複数の宗教の受容形態の差異という視点から信仰圏の空間的特性を解明することである。

本研究では、茨城県南西部から埼玉県南東部にかけての農村部の集落において、講が組織され、農業神、雷神として多くの参拝者を集めている金村別雷神社（茨城県つくば市）に対する信仰を事例として分析を行った。第Ⅰ章で雷神信仰の特性を概観し、金村別雷神社の立地と沿革について検討した。第Ⅱ章では、金村別雷神社の信仰形態を共同祈願と個人祈願という視点から分類し、講社と個人崇敬者の分布を基に、金村別雷神社信仰圏の地域区分を画定した。第Ⅲ章および第Ⅳ章では、第Ⅱ章で地域区分された類型をもとに、各信仰圏における信仰の地域的展開を、具体的な事例地域の分析を行った。上記の分析結果から、第Ⅴ章において、各信仰圏において金村別雷神社に対する信仰の受容形態の差異を明らかにすることを通して、金村別雷神社信仰圏の地域的特性を解明した。講社および個人崇敬者の属性に関しては、金村別雷神社社務所が所蔵する原データを使用し、事例地域の分析（Ⅲ、Ⅳ章）は、著者自身による現地調査を基に行った。

金村講は1都3県の254集落に分布している。金村別雷神社の南部・西部方向を中心とする半径10～30km圏に分布の稠密な地域があり、最外縁部は50km圏に及ぶ。個人崇敬者は1都7県に分布し、その稠密域は神社を中心とする10km圏内の近隣地域であり、外縁部にかけて漸次減少する。近隣地域では、元日の初詣に参拝する崇敬者が卓越し、家内安全を祈願する例が多い。これに対し雷除けのような金村別雷神社の御利益と直接関連する祈願は、少数ではあるものの外縁地域の祈願者にみられた。

第一次信仰圏における金村信仰の地域的特性としては以下の点が指摘された。金村別雷神社から徒歩一日圏に

位置する第一次信仰圏では、第二次世界大戦前より、降雨祈願の対象として金村信仰が受容されており、第二次世界大戦後には神社側からの講結成の勸奨を受けて、新規に講社が組織された。金村講は、他の宗教組織（氏子組織）や自治会組織と金村講組織が結合し、自立的な宗教組織として機能しておらず、金村信仰は、在地の産土神や遠来の利益神に対する信仰とは異質の鎮守神として地域に受容されている。この鎮守神的性格は、神宮大麻の配札や産土社祭礼の執行を通して、金村宮司と集落との結合により強化されている。

第二次信仰圏における金村信仰の地域的特性としては以下の点が指摘された。第二次信仰圏には、明治期以前に起源を有する相対的に古い時期に組織された講が分布している。本地域における金村講は、氏子組織や他の社寺参詣組織、また自治会組織から自立した、独自の宗教組織を形成している。金村別雷神社と集落とは、雷神に由来する御利益を核として結合しており、第二次信仰圏における金村信仰は、在地の産土神や鎮守神とは異なる遠来の利益神として地域に受容されていることが解明された。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

複数信仰が集落において同時に受容されている日本では、集落において複数の宗教に対する信仰形態が重層的に分布しており、この複数の宗教相互間の階層的な分布構造を明らかにすることが、宗教現象から日本の地域性を解明する上で必須の条件となると考えられる。従来の宗教地理学の研究では、ある特定の宗教に対する信仰事例を集落内に併存する他信仰の受容形態と比較検討することを通して、信仰圏の空間的特性の解明にあたるという視点が欠如していた。著者による信仰圏研究は、信仰圏内にみられる地域分化が、鎮守神と利益神という信仰の受容形態の差異から説明されることを、信仰の重層性の中から明らかにしたものであり、このような日本の宗教的地域構造の把握と、神社と地域との関連性についての詳細かつ空間的な解明は、従来の宗教地理学に新たな知見を加えたものである。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。